

平成18年度 第2回高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時 平成18年11月30日(木) 13:30～16:30
場 所 高知グリーン会館 2階 グリーンホール

1 開 会

- (1) あいさつ
- (2) 日程確認
- (3) 会長・副会長選出

2 報告及び協議

(1) 報告事項

これまでの協議経過と今後の方向性について

(2) 協議

「人権教育推進プラン～人権教育のすすめ～」の改訂について
いじめ問題にどう取り組むか

【人権教育の推進について～人権教育推進プランの改訂にかかわって～】

人権教育リーダーの育成は大切だが、リーダーが活躍できる素地が職場にあるかどうか問題。そのあたりをどう克服していくかが課題。県内の現場の実態を細かく見極めていく作業も必要。

市町村では、比較的若い層が人権教育の必要性をもう一つ感じていないのが現状。「社会教育での指導者養成」ではこのあたりが課題。県でも実態を把握することが大切ではないか。

指定校の取り組み(「点」)を他の学校へとつなぎ(「線」)、広げてほしい(「面」)。「人権教育の指導方法等の在り方について」(文科省)にもあるが、県として、学校等の取り組みの情報の収集や点検・評価を大事にしてほしい。

指定を受けるメリットを具体例をあげて学校に丁寧に説明することが大切。また、教育委員会もアンテナをたて、学校の取り組みを評価していくことが大事。すると学校もやる気になる。

今の中学校の大きな課題は進路保障と不登校対策。人を大事にすることを基盤に置いて取り組みをすすめている。自分や人を大事にするのは中学校になって急にはできない。中学校区での保・幼・小・中の連携が大事。また、最近は人間関係が希薄になっている。エンカウンターやアサーションなど人間関係づくりの学習などにも取り組んでいる。

いじめ・不登校(園)は保育所の時から始まっている。そこから切り込むことが大切。連携については保・小・中の連携の話し合いをどれだけしているかがカギ。問題が起きたときは校種間で連携して取り組むなど、互いの機関の相互理解を深めていくような体制づくりが必要。

リーダーを育てる場合、管理職はそれを守り、支えなくてはならない。人権教育をすすめるには、管理職の考え方が大事。教育活動全体を通じて取り組むことなど、管理職が理解して職員に伝え、実践を評価することが大切。

開かれた学校づくりを一步進め、地域の人たちを逆に学校の中へ引き入れて、学校を拠点にして保護者をはじめ、先生たちも、何でも相談ができる場づくりができないか。それがこれから進むべき道の1つではないか。それは、結果的には子どもたちの安心・安全の保障につながる。

人事交流とはいかないまでも、校種間連携は橋渡し役が各校種にいればもっと理解し合える。

人権教育は人間教育とも言えるのではないか。しかし、先生、保護者、子どもの意識に人権、人権教育がまだまだ浸透していない。人権教育は「特別な教育」「専門家」に任しておけばいいという考え方をしているのでは。身近な問題などいろいろなことに置き換えて浸透定着を図る必要がある。

「自尊心」、「他者への想像力」など言葉がわかりにくい。みんなに分かるものにする必要がある。生活の基盤になる教育だから、伝えて理解してもらって行動してもらえる言葉を使ったらどうか。

【いじめ問題について】

いじめ相談では、出口が見えなくなって相談に来たり電話してくる場合が多い。焦って早く解決しようとする余計に無理がいくので、じっくり時間をかけて考えていくように話している。最近の傾向としては、親も子もコミュニケーションの取り方が非常に苦手。また、「自分の子どもさえ良ければ」という傾向が見られるなど、保護者が変わってきているという印象がある。被害・加害の双方の保護者から相談を受けるが、保護者の気持ちをほぐすことが大事。親が変わると子どものほうも少し余裕が出てくる。一つ一つの相談をその場で見極め、どう支援をしていくか個々のケースで考えていかないといけない。いじめだからこういうことがいいと十把一絡げにしたり、1つ成功したから他もこの方法でいけるんじゃないかということはない。一人一人背景が違う、環境が違う、いろんなことを考えながら支援していく必要がある。

コミュニケーションは社会生活の中で学んできたという経験しかないが、人権教育を学んでいるなかで、伝え方とか、聞き方など、教えていく必要を感じている。保育園の親を見ていると、逆に、子どもを守らなければと責任を感じたり、本当に悩んでいる親自身も多いのではないか。子どもたちを見ていて、人権教育や福祉教育の大切さを、子どもたちが実感できるように伝えられていないのではないか。そこを見直す必要を感じている。また、いじめなどを「起こさない」から一步踏み込み、子どもたちが自分にとってどうなのかということを考えていくことが大切。それは親としても、一緒に考えていかないといけない。

いじめで子どもが不登校になった経験から言えば、子どもに逃げ場があるかどうかがすごく大事。家庭でもいいし、仲間でもいい。最終的な逃げ道がどこかにあれば救われるのでは。教育行政の問題として気になるのは、校長先生は、「いじめを起こした学校」という評価をすごく気にしているのではないか。逆によくぞいじめの実態を見つけて対応してくれたという評価を教育行政の側がするという考え方に変わっていかないと、解決していかないのではないか。

トラブルが発生したとき、教師も含めて子ども同士が話し合い解決の糸口を探っていく作業が

大事。おとなが「こうなさい」でなく、どうしたらいいか子どもに考えさせる時間、自分たちでどうにかしようとする時間を大事にしないではいけない。そのなかで一番ポイントにしたいのが、「自分もお友だちも大事にしよう」を伝えていくこと。いじめはおとなの社会の反映ではないかと思う。身近で起こったら見逃さず、自分たちができることをしていく。地域のおとなとしておせっかいを焼くことも必要だと思っている。

子どもは中学校のとき、「目立つから」という理由でいじめにあった。家族にとっても苦しみの連続だった。そのとき、担任と同和教育主任の二人の先生が、すごくケアをしてくれた。高校でもいい先生方に恵まれた。行き場のない子どもが自分の行き場を見つけて、居場所があることを実感したとき、子どもはまた切り替えることができると思う。まず親が居場所にならなくてはだめだと思うが、次に理解し、認めてくれ、居場所になってほしいのは、教育現場であれば学校の先生。それが大事ではないかと思う。

学校現場を預かる者としては、常に高いアンテナをはって実態を把握し、もしいじめが起きたら絶対放置しないという姿勢で取り組んでいる。いじめのきっかけとなる一つは異質性の排除。学校では、「違っていい」ことを教えることが大切。いじめを発見したらチームで取り組むことが大切。最後には教育委員会が支えてくれる態勢があれば本当に心強い。

これまでの話のなかで「自分とのかかわりが明確にされていない」というのがあったが、その指導をすることが大切。同和問題にしても、自分とのかかわりが明らかにされていないから部落差別は残っているのではないか。小中高と「自分とのかかわり」を大事に指導していくことが必要。

小・中学校、高校と、いじめで本当につらい思いをした。家族にも相談できず、先生に相談しても本気で考えてくれず、もっていく場がなかった。「自分が消えたらいいのではないか」という気持ちになり、家出をして「死」を考えたときもあった。今、いじめによって自殺を選んでいる子がいる。その気持ちは痛いほどよくわかる。でも、私は死が怖かった。報道機関は事実を伝えるだけでなく、命の大切さをまず呼び掛け、伝えてほしい。息子は、「ぼくもいじめられたりもしたけど、友だちが救ってくれた。」「今の子は友だちとのコミュニケーションがとれているのだろうか。一番は友だちとのかかわりだと思うけど」と言った。私は本当に、あのとき死ななくて良かったと思う。

いじめられている子を全面的にケアし、フォローしていかなくてはいけない。一方で、いじめられている子どもはどのような気持ちや心理なのか。そこを考えていかなくてはいけない。

私は、子どもたちの言葉の使い方が気になっている。暴力的な言葉が多過ぎる。自分の気持ちを表現できていない場合が多い。私たちおとなの日ごろからの語りかけが大切だと思う。

私のところにもいじめに関するいろいろな相談がある。いじめで学校と親がトラブルになって思ったのは、日頃から学校との信頼関係がとれてなかったのかということ。もう一つは、間に入ってくれる人がいなかったのかということ。行政が立ち上げて、相談を気軽にできる場づくりを各地域に広げていってほしい。

人権教育は人間教育だと私もそう思う。子どもに教えるというより、おとなが考えていけない問題ばかりだと痛切に今感じている。

養護学校の子どもをいじめるこんな母校（高校）が嫌いだったと言う大学生がいた。母校をいい学校だと思えない子どもはかわいそうだと思う。学校の在り方を決める、環境をつくるのは先生方。そのあたりの責任を持つべきだと思う。

時々、大学生の相談にのったりするが、二十歳の人でも「前に話したことを覚えていてくれることが嬉しい」と素直に言う。だから、小学生、中学生、高校生は、学校の先生や家庭が、日々の変化に気付いてくれることを待っているんだろうと思う。いろいろな学校に行って、命の大事さについて話す。子どもが命をくれた親を恨むのはとてもつらいこと。子どもに対して、親への感謝の気持ちを持つことを伝えることが大切。一方で、命を育んだおとなは、そのことの責任を果たしていくことが大事。その原点を今、おとなたちは考えるべきだと思う。

地域に、身近なおんちゃん、おばちゃんがない子どもは多い。気軽に「おはよう」という会話ができない。私は意識して知らない子どもに「おはよう」と声を掛けたりするが、簡単なようで「おはよう」さえも、おとなが、すれ違った子どもに言えない状況がある。どういう場面でも、やはり教育力を上げるためには、家庭・学校・地域で同じテーブルのうえで話をしなくてはいけない。やはり、おとなが何ができるのかということを考えていかなければならない。

放課後、地域の施設に集まってくる子どもを見ていて思うのは、どの子も聞いてくれるおとながいるということに安心を感じているということ。自分を認めてくれる、自分を知っているおとながいるだけで、子どもが元気を出せるということ子ども表情を見て思う。学校でも、家でもない場所におとながいることが大事な時代ではないかと感じる。知っているおとながいる、こんなつまらないことやけど聞いてくれるおとながいる。「あなたはあなたでいいんだよ」と伝えてくれるおとながいてほしいと思う。

人権課題も自分の問題として考えられない限り、子どもたちに伝えることができない。子どもたちも自分の問題として人権課題を考えられない限り、知識だけの勉強になる。そういう地道な取り組み、一つ一つ子どもとの関係をつくる中での人権教育であってほしいと思う。

いじめが起きたとき、対症療法的な取り組みをずっとやっているが、やはり予防的な教育として人権教育が大切だと思う。県教委の児童生徒支援課と人権教育課が一つの取り組みとして機能しないと、効果があがらないと思う。また、いじめへの対応をはじめ人権教育の充実に向けて予防的な視点にたち、文部科学省の「人権教育の指導方法等のあり方について」を徹底する必要があるのではないか。

いじめも不登校もなくすことは、人間力、人間関係力を高めることだと思う。中学校の子どもたちを見て、小学校のときに異学年で集団で遊ぶ、もまれることが本当に大事だと思う。そのなかで、嫌なことや思いやりも含めていろいろ経験し、育っていくのではないか。もう一つ、いろいろな問題を自分の問題、自分たちの問題として考えられる力を付けていくということが大事だと思う。

人権教育をやさしく言うと、「人を大切に」、「命を大切に」この二つで言い尽くせるのではないか。そうした観点で、いじめ問題への取り組みについて、次回も続けて意見をお聞きしたい。